

# 緩和ケアニュース

第35号

特集： 第23回倉敷緩和ケアセミナー感想記

『がん患者のスピリチュアルペインとそのケア』



Photo T.I

公益財団法人 大原記念倉敷中央医療機構

倉敷中央病院 緩和ケアチーム

2016年3月発行



第23回倉敷緩和ケアセミナーが2016年2月6日(土曜日) 総合保健管理センター内の古久賀ホールで開催されました。特別講演の講師には、NPO 法人対人援助・スピリチュアルケア研究会理事長の村田久行先生をお招きし、『がん患者のスピリチュアルペインとそのケア』という演題でのご講演を頂きました。院内外あわせて96名、医師・看護師・薬剤師・リハビリ療法士・臨床心理士・医療ソーシャルワーカーなど多くの職種の参加を頂きました。講演会終了後に、いろいろな職種の方から感想を頂戴しましたので、ご紹介します。



#### 薬剤師 Aさん

「スピリチュアルペインには『将来の喪失』『他者との関係の喪失』『自律の喪失』がある」講演でスピリチュアルペインの構造について聞いたとき、私は過去に経験したとある服薬指導を思い出しました。その服薬指導で私は患者さんから薬が飲みにくいという相談を受けました。詳しく話を聞くと「粒の薬が喉の途中で止まってしまう。看護師さんに粉にしてもらっている。申し訳ない。」と看護師に錠剤を潰してもらっていることが気になっている様子でした。そこで私が「粒をオブラートに包んで飲むのはどうですか？」と提案したところ、翌日「オブラートで飲んだらスルリと飲めました！」と笑顔で報告してくれました。今思うとあれは『自律』の回復

だったのではないのでしょうか。村田先生の講演を聞いて患者さんのスピリチュアルペインを軽減するには傾聴することはもちろん、薬剤師として患者さんが自分で薬の管理を行える方法を提案することも大事な役割を担うのではないかと思います。



#### 医師 Bさん

スピリチュアルペインという言葉は聞いたことはありますが、曖昧でよくわからないものでした。しかし、この講演を聞くことでスピリチュアルペインについて理解をすることができました。スピリチュアルペインのケアを行う際には時間存在、関係存在、自律存在という3つの次元でアセスメントすることが重要で、それぞれの次元に対してケアを行っていけば良いという具体的な方法を学ぶことができました。患者さんとのコミュニケーションスキルでは、反復や、ちょっと待つ(沈黙)というスキルの具体的な使い方も教えていただくことができました。患者さんと接するときに、患者さんが死への恐怖や絶望を訴えられたりしたときに、どう返事をしたら良いかわからないことがありましたが、今後は反復や沈黙のスキルを使い対応を試みようと思います。



#### 看護師 Cさん

セミナーの中で印象深かった話に、「既存(過去)と将来に支えられて現在が成立する」というものがありました。通常私達は、過去があって今があり未来があると考えます。しかしそれはあくまで物理的な時間の考え方であり、生の存在構造とは異なります。死を予期し、自己の将来性が揺らいだ時、生の存在構造の順序が崩れ、人は現在の自分の頑張り、生が無

意味であると感じてしまうということでした。他にも様々な因子はありますが、その虚無感から生じる苦痛がスピリチュアルペインです。2棟3階では白血病と診断される方が多く、死を予期される場面が多くあります。患者さんの思いをベッドサイドで傾聴することも多く、死や病気に対する恐れ・不安について、涙を流しながら訴えられることもあります。セミナーでは話を傾聴すること、反復することは患者さんが自分自身のおもいを整理することの手助けになり、スピリチュアルケアにおいて大切なことであると話されていました。患者さんに生じる苦痛の構造、スピリチュアルケアを知ることで、看護師として患者さんの傍に寄り添うことの大切さを改めて感じ、患者さんの傍に寄り添う時の自分の役割を知ることができたと感じています。



#### 医療ソーシャルワーカー Dさん

スピリチュアルケアとは、人生の意味や目的の喪失（将来の喪失）、家族や周囲などの関係性の喪失（他者の喪失）、衰弱による活動能力の低下や依存の増大（自立・生産性の喪失）のスピリチュアルペインをケアすることであるとお話いただきました。これまで相談業務の基本は傾聴と共感であると学んできましたが、自分が思う「私」と他者から思う「その人」の認識のずれからわかってもらえない体験が孤独へと繋がること、傾聴するためには言葉を反復し時間を持つことで共にいることを伝えるスキルを持つことの大切さも教えていただきました。その人が自分自身を肯定しようと最期まで生きようとする事への支援が出来るように研鑽を重ねていきたいと思います。



#### リハビリ療法士 Eさん

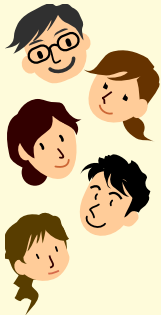
講演では、スピリチュアルペインの構造を明らかにし、誰に対しても可能なスピリチュアルケアの方法を御教示いただきました。スピリチュアルペインとは「自己の存在と意味の消滅から生じる苦痛（無意味、無価値、空虚など）」と定義されていますが、何か得体の知れないもの、あるいは日常とは縁遠い宗教的なものという印象があるかと思います。しかしその構造として「時間存在」「関係存在」「自立存在」としての人間があることを認識できれば、身近なものとしてとらえることが可能になるということが理解できました。また、ケアの方法としては傾聴が重要で、そのスキルとして「反復」や「ちょっと待つ」といった行動を、意識して丁寧に行うことの大切さを教えていただきました。



#### 編集後記

今回は、年2回開催している「倉敷緩和ケアセミナー」を感想記という形で紹介致しました。本セミナーはわが国の緩和ケアの分野において先導的な立場で活躍されている方をお迎えしご講演いただいております。これからも多くの方の期待にこたえられるよう、より良いセミナーの企画開催を心がけたいと思います。次回のセミナーは8月20日に開催を予定いたしておりますのでご期待ください。

# 当院の緩和ケアについて



緩和ケアは、病気の終末期を意味するものではありません。病気から来る苦しさ・つらさは、病気の診断がついたときから始まるかもしれません。ですから、病気の時期とは関係なく緩和ケアは必要となってきます。このような考えに基づいて、当院では緩和ケア科を中心にいろいろな職種の医療者が協働で、外来患者さんや一般病棟に入院中の患者さん、そして緩和ケア病棟に入院される患者さんに対して緩和ケア診療をおこない、患者さんやご家族が安心して生活することができるように支援しています。

「緩和ケアチーム」は、医師（緩和ケア科医師、精神科医師）、看護師（がん看護専門看護師、がん性疼痛看護認定看護師、緩和ケア認定看護師、訪問看護師）、薬剤師、臨床心理士、ソーシャルワーカー、作業療法士、歯科衛生士、管理栄養士などで構成されています。

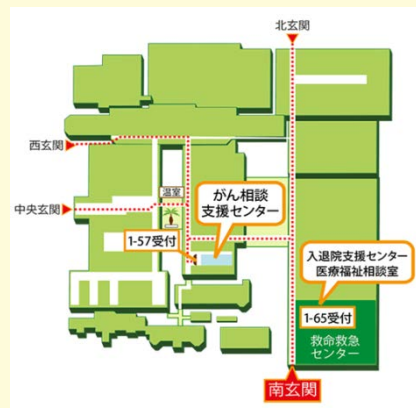
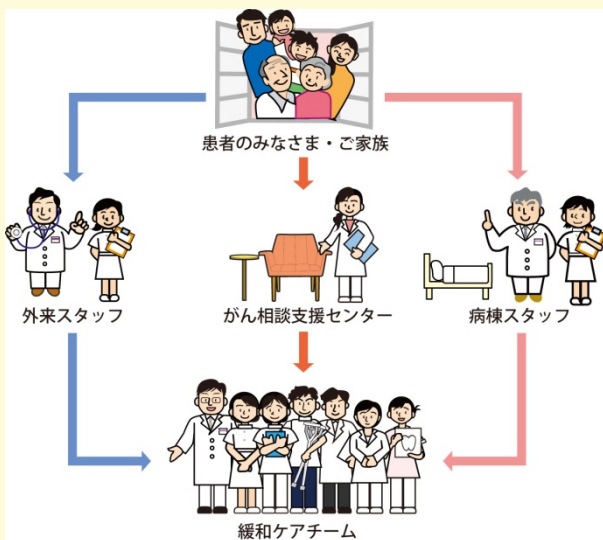
「緩和ケアチーム」は、治療時期に関わらず、患者さんのからだのつらさ（疼痛・呼吸困難・吐気など）や気持ちのつらさ（不安・不眠など）を和らげる治療やケアについて一般病棟や外来のスタッフと一緒に対応します。また患者さんの社会生活やご家族のケアを含めたサポート、そして緩和ケア病棟入棟に関するご相談なども行います。

## ご相談の ながれ

緩和ケアについて話を聴きたい、緩和ケアを希望される際には、まず主治医・看護師（外来・病棟）・がん相談支援センターにお尋ねください。

## がん相談 支援センター のご案内

当院ではがんに関する相談をお受けする窓口を設けています。がん相談支援センターへ相談を希望される方は、入退院支援センター（1-65）へお声かけください



相談時間：平日 9:00～17:00  
土曜 9:00～13:00  
(受付時間は相談時間の15分前までです)  
直通電話：086-422-5063  
(兼 医療福祉相談室 直通)

発行元：公益財団法人 大原記念倉敷中央医療機構 倉敷中央病院 緩和ケアチーム

編集委員長：佐野 薫（医師）

編集委員：里見史義（作業療法士） 橋本和憲（医師） 長谷井慈子（事務） 平田佳子（看護師） 50音順